

## まえがき

職員室にいと、「高学年になると子どもが言うことを聞かなくて……」という愚痴や「確かに高学年らしい子どもはいるけれど、みんな幼くて……」などというぼやきを時々耳にすることがあります。

また、廊下を歩いていると、ある教師が真剣な表情で叱っているのですが、対する高学年の子どもはそっぽを向き、反抗的な態度を示しているところを目にすることもあります。

中学年までなら言って聞かせることもたやすくできるのですが、高学年になると子どもを良くしよう、成長させようという教師の熱意は、空回りすることが多くなります。残念ながら、教師の熱意はなかなか子どもに伝わりません。

なぜなら、教師がやりたいことと子どもがしてほしいことは異なるからです。それなのに教師の視点、大人の目から見た常識だけを当てはめようとしてはいないでしょうか。そもそも「子どもらしさ」とは何でしょう。「子どもの要素」とは何でしょう。

例えば、授業中に雨が降り出すと、「あっ、雨だ」と声に出し、窓を指差します。子どもは思ったことを口にし、変化や音に反応します。体育の時間、サッカー競技では必死になってボールを追う子どもも、一輪車の練習はやろうとしません。子どもは好きなことは一生懸命に取り組みますが、苦手であったり、嫌いなことは避けようとしています。掃除の時、「上手に拭いているね」とほめると、ますます磨きをかけて拭きます。さらにほめると、もっと頑張ろうとします。

「子どもらしさ」「子どもの要素」とは、今の自分が幸せでありたい、満足したいということなのです。そこには我慢はありません。思ったら、即実行なのです。

こうした子どもらしい体験を中学年までにしっかり繰り返していくことで、高学年になると状況に応じた行動を選択できるようになっていきます。つまり、「子どもらしさ」を発揮するということは、成長過程において重要な体験なのです。そして、この体験の積み重ねが経験に変わります。

高学年だからといって、子どもを早く大人にはしてはいけません。しっかりと子ども扱いしてあげましょう。子どもらしさを発揮させ、子どもの要素を使い切らせてあげましょう。すると、子どもは素直になれるのです。教師の気持ちがわかり、期待に応えようとしています。

本書では、高学年の子どもらしさとは何か、そして、教師としてそれにどう対応し、指導すればいいのかについて書いています。参考にいただければ、高学年の子どもへの見方が変わり、温かい眼差しで子どもたちを指導できるようになると思います。何よりも、教師であるあなた自身の心が楽になることでしょう。そして、「高学年といえども、子どもだな」と子どもの成長に目を細め、日々子どもたちとの触れ合いを楽しめるようになるでしょう。

まえがき 3

Chapter  
**1**

指導の前に要チェック!  
**今時の高学年児童は  
こんな子どもたち**

- ① 自分を「客観視」できるが「過小評価」しがち 10
  - ② アドバイスを否定的に捉えがち 12
  - ③ ちょっとしたことでも心がブレやすい 14
  - ④ 教師に対して「不満」をためやすい 16
  - ⑤ 傷つきたくないから「挑戦」を避ける 18
  - ⑥ 友だちと「同じ」「一緒」だと安心できる 20
  - ⑦ 教師には反発しやすく、下級生には寛大 22
  - ⑧ 教師の励ましを曲解する 24
  - ⑨ 追い詰めれば追い詰めるほど非を認めなくなる 26
  - ⑩ 自分のフィルターを通して話を受け取りやすい 28
- column 1 可能性を見せてあげるのも教師の役割 30

Chapter

2

## 指導のヒントがここに！ 高学年児童は、 こんな教師を望んでいる

- ① 優しい教師よりも厳しくてもきっぱりした教師 32
- ② 長い説教をしない教師 34
- ③ 説得よりも納得させてくれる教師 36
- ④ 任せてくれる教師 38
- ⑤ 自分のやり方を押し付けない教師 40
- ⑥ プライドを尊重してくれる教師 42
- ⑦ 頑張りを見守り、認めてくれる教師 44
- ⑧ 言い分に耳を傾けてくれる教師 46
- ⑨ 学ぶ楽しさを教えてくれる教師 48
- ⑩ 子どもの要素を認めてくれる教師 50

column 2 叱られなかったからこそ反省し、行動を改める 52

Chapter

3

## 指導の基本！ 高学年児童は、 とことん「良さ」を引き出せ！

- ① まずは理想の高学年像をイメージさせる 54
- ② 期待ではなく、必要とされていることを伝える 56
- ③ 魅力的な条件を提示してあげる 58
- ④ 「間違い」は良くなってから指摘する 60

- ⑤ 反発を想定してから対応する 62
- ⑥ 変えるのではなく、変わるのを待つ 64
- ⑦ 甘えるタイミングをつくってあげる 66
- ⑧ 「はあ〜」「別に〜」は気にかけてのサイン 68
- ⑨ 大人扱いすると「やる気」が倍増 70
- ⑩ 教師の思いは他の先生に託す 72

column 3 教師の間違いは気にしない 74

Chapter  
**4**

まずは見方を変える！  
**困った高学年児童は  
こう指導する！**

- ① 叱る前に子ども扱いする 76
- ② ほめるより感謝を伝える 78
- ③ 話を聞いてくれていると思わせる 80
- ④ 名前を枕詞にして雑談する 82
- ⑤ 教師の失敗談を語る 84
- ⑥ 癪にさわる時ほど丁寧な指導を心がける 86
- ⑦ 教師の思いは付箋紙で伝える 88
- ⑧ 「できる！」を演出してあげる 90
- ⑨ プライドの高さは自信のなさを受け止めてあげる 92
- ⑩ 「それを知ったら悲しむね」と親の思いを想起させる 94

column 4 一人は一人のために、みんなも一人のために 96

## 高学年女子と男子の指導法

- ① **基本の叱り方** 女子は斜向かい、男子は正面 98
  - ② **基本のほめ方①** 女子は「物」を、男子は「人」を 100
  - ③ **基本のほめ方②** 女子は変化した時、男子は過程 102
  - ④ **基本のほめ方③** 女子は誰もいないところで、男子はみんなの前で 104
  - ⑤ **声かけ** 女子にはまめに、男子には必要な時に 106
  - ⑥ **「先生、嫌い!」** 女子は関心のサイン、男子は根が深い 108
  - ⑦ **比較** 女子は同性との差を気にし、男子は奮起する 110
  - ⑧ **わがまま対応** 女子には付き合い、男子には即指摘 112
  - ⑨ **悩み対応** 女子会で情報交換、男子会で自信を深めさせる 114
  - ⑩ **トラブル対応** 女子は心配すると落ち込み、男子は奮起する 116
- column 5** そうだ! 先生を頼ろう 118

あとがき 120

## 期待ではなく、必要とされていることを伝える

期待は相手に求めることです。それに対して、必要は現状への再確認です。高学年の子どもは自分が必要とされることで存在価値を再認識します。

### ●期待していることを伝えても行動は変わらない

掃除の時間に遊んでいる子どもがいます。教師は子どものもとに歩み寄ると、叱られると思った子どもの身体が止まります。そして、「友だちは黙働をしているよ。高学年なのだから、友だちができることは君もできるよね」と期待していることを伝えると、「ハイ」と返事をしますが、はたして、翌日も遊んでいます。

それはただ、叱られなかったことに安堵しただけで、思いの変化が行動の改善にまではつながらなかったからです。

### ●必要とされていることを実感させる

例えば、掃除を2つのグループに分けて、ほうき・塵取り・雑巾掛けに分担させた時、ほうきの担当が遊んでいたとします。掃いてくれないと拭くことができません。そのため、グループの掃除は滞ってしまいます。

こうした時、ほうきを別の子に替わってもらい、遊んでいる子呼んで、他方のグループの掃除の様子を見せるようにします。「全員が大切な役割を担っています。君の担当はほうきだよ。ほうき担当が集めたゴミを塵取り担当が集めてくれるから、雑巾担当が床を拭けるんだよ。君も貴重な戦力なんだよ。君の力が必要なんだよ」と必要とされていることを伝えるのです。

掃除を客観的に見せることで、これまでの自分を反省し、同時に自分の必要性が実感でき、行動を改めようとしています。



## 期待は思いを伝えるだけ



期待感を伝えると「次は頑張ろう」と励みにしようと思えます。しかし、思いと行動は別です。



## 必要は行動を改めさせる



必要感とは自分の役割を再確認できるだけではなく、「よし、やるぞ!」と意気に感じ、改善へと向かわせます。

## + ワンポイント アドバイス

### どこではなく、全部

「どこを改めたらいいですか?」と子どもが聞いてくることがあります。「どこ」とは部分です。教師は、「全部変えるんだよ。ほうきの掃き方の手順、きれいにしようという心構え」などと丸ごとの変化を求めていきます。